

## 例会報告

### 気象学史ならびに気象教育に ついての講演会

根本 順吉

3年まえに他の学会にさきがけて、その学問分野の歴史的研究や教育の問題を積極的にとり上げたこの分科会は、昨年の気象学会75年史編さんについての講演会につづいて、今年は4回目をむかえたわけである。8月29日(金)の午前、午後をつうじて講演や討議が行われたが、場所は気象庁研修所第3教室、出席者は30名近くで、他のランチより少いかもしれぬが、夏がれの時期と、その対象から考えてなかなかの盛会であったと思う。たち入った討議が6時すぎまでつづけられた。次に講演者とその題目および要旨などをおつたえしよう。

午前中(10時30分より) 座長 有住直介

1. 高橋浩一郎(長期予報管理官付): 気象の初等教育について、これは昭和36年度を一応の目標として改正がすすめられている小、中学校の理科要目のうち気象関係事項を解説したものである。大きなしかも、大切な問題であるわりに質問などやや低調であったのは一般には改訂の趣旨がよくのみこめないからなのであろうか。

2. 渡辺次雄(気象庁図書課): 寺田寅彦の気象学研究(日本の気象学と外国気象学の交渉—3—)

今回の講演題目はどれをみてもかなりヴァリエティにとんでいて、また質問や討議も活発に行われたのであるが、その中でこの渡辺次雄氏の寺田寅彦の評価については多くの異論が出され、討論が盛んであった。この報告はこれにつづく寺田寅彦と藤原咲平についての比較研究の序説にあたる部分であり、その部分まで議論が展開されないと詳細に論議できないわけだが、渡辺氏の大たんな見解は賛否にかかわらず、深い示唆を与えるものであった。

3. 渡辺和夫(気象庁予報課): アメリカにおけるレーダー気象学の発達史、ごく最近に至るまでのあゆみを年表式にたどった。現地でも最近まで2年間研究を続けられた人の発表であるだけに、多くの新しい事実の研究発展史上における位置づけは教えられるところが多い。

午後(13時30分より) 座長 根本順吉

4. 佐藤順一(岡田研究室): 初期の高層観測について

5. 神保孝雄(気象協会): 森林測候所創設当時の思出

4, 5はいずれも創設当時にこれらの仕事に従事され

た方の話で、今まで記録に残されなかったことなどをふくめて思い出話し式にユーモラスに語られた。

6. 荒川秀俊(気象研究所): 文永の役の台風はこなかった

7. 荒川秀俊(気象研究所): 治承4年の大旱ばつ  
荒川氏の二つの発表は共に日本歴史上の記録について考証したもので、前者は文永の役の終りを告げたのは台風でないことを幾多の資料により実証したもので、また後者では治承4年(西紀1180, 平氏の富士川の潰走の年)が近畿地方を中心に大かんばんであったことを当時の日記などの資料によって明らかにされた。

8. 吉野正敏(教育大): 気候概念の変遷と気候学の発達  
今回は序報として18世紀までの気候概念の変遷と気候学の発達を4世紀まで、5~15世紀、16~18世紀にわけて論ぜられたが、ある場所の大気の状態の科学としての気象学の成立を明らかにしたものであった。

9. 堀内剛二(気象庁研修所) モンテスキューにおける環境としての気象条件について

10. 堀内剛二(気象庁研修所): 科学者水島寒月について  
堀内氏の発表のうち前者はモンテスキューの名著「法の精神」を中心として気候環境について論ぜられ、また後者は葦石の「笛」登場する架空の科学者寒月をしらべることによって科学者が当時世間でどのようにみられていたかを明らかにしたものであった。

11. 久米孝孝(気象庁予報課): 軍艦欽傍の喪失と中央気象台の成立について  
欽傍は明治の中頃に日本政府がフランスに注文してつくった軍艦であるが、これがフランスから回航する途中、明治19年12月3日シンガポール出港後着として消息をたったのである。久米氏はこの喪失の原因として南支那海の季節風の吹き出しまたは台風を考えられたが、このことが翌明治20年の東京気象台から中央気象台への発展、気象台測候所条例の発布と何らかの関係を持ちはしないかということを示唆したものである。

12. 奥田穰(気象研究所): 「日本九峰修行日記」天気考  
これは先年科学史家の大矢真一氏から借用した山伏の日記に記載された19世紀始めの3年間にわたる日本本土の天気をたんねんに地区に記入しながらたどったもの。時間の都合で十分に話していただけなかったことは残念であった。

会が終わったあとで、この会合はディレクタント的であると評された方もあったが、しかしこれは良く解釈すると研究発表などにおいて、他の会合でみられるような発想法の固定化がみられぬということなのであり、忌憚のない意見や討議がどの発表にもみられたことは3年間の成長を物語るものであるとみられぬこともないのである。